

私の戦争体験

松本 勝利

作文が苦手な私にとって過去 50 年の思いを書くなどということは、大変心の重いことですが、自分の経験を書き残すことも意義あるものと思いペンを握りました。

人が生きるのに、まず衣食住と言われますが、この度は食について書いてみようと思いません。

子どものころ朝昼晩の食事について母親に厳しく言われたことは、一つには一粒の御飯も粗末にしてはならないこと、二つにはおかずを食べ残してはならない、残るようであれば箸を付けてはいけない、ということでした。

このことは、私だけでなくどこの家庭でも言われ、小学校高学年でも先生に教えられました。当時は、学校給食がなく、各自の手弁当でしたし、また近郊ではお米は作られておりませんでした。そのため、今では私の日常生活に根付き、旅行の際などに食べる駅弁の折の蓋に付いた米粒を一つずつ食べる習慣があります。

食の辛い思いは、終戦後満州で抑留され、ソ連邦のモスクワより東方約 700 キロメートルの地エラブカ地区、ラーダの森収容所で過ごしたころの生活でした。

1 日の食事は、300 グラムの黒パンとスープ、それに一杯の紅茶（砂糖 10 グラム付き）でした。日本では、黒パンなど見たことも食べたこともなく、味は特殊な酸味があり、舌ざわりもザラザラして喉のとおりが悪いものでした。しかし、ほかに食べるものがないので、仕方なく口にしましたが、馴れるに従ってボリュームがあり、特殊な酸味が空腹を補ってくれ、忘れられない味となり、むしろ日本の食パンは、味気なく食べ応えのないものとなりました。

スープは、日本の重湯よりも軽く、数えることができるほどの米粒が浮いていると言ったようなものでした。

今振り返って見ますと、当時のソ連の国情としては、独ソ戦の直後でもあり、食糧事情が良くないようでした。たまたま町で出会った日露戦争に参加したという民間の年寄りも、「自分達は、お前達よりもパンの配給が少なく、スープには米も入らない」と嘆いておりました。

ソ連は、所謂「働かざる者食うべからず」の世情でしたので、私達抑留者も自分達が食べる野菜などは（収容所には約 2 千人くらい居住）農場で馬鈴薯、キャベツ、大豆などを作っておりました。秋の収穫作業では、監視兵の隙を見て生で食べました。初めはエグかったり（馬鈴薯）、生臭かったり（大豆）しましたが、空腹には勝てず、少しずつ食べ馴れて腹を満たしてくれました。生で食べることには色々と挑戦しましたが、最期まで食べられなかったのは、燕麦とビートでした。燕麦は、馬が食べるのだから人も食べられる筈と食べたのですが、口の中で殻が刺さり駄目でした。また、ビートは、初めは甘いのですが、すぐにエガラクなり喉をとおりませんでした。

野原に生えていた野ビルといわれたニラに似た植物は、かめば粘りが出て貴重なものでした。また、野生のゴボウは見付け次第喜んで食べたものでした。しかし、ロシア人には食べる習慣がなく、「俺の国では馬も食べない」と私達を軽蔑しておりましたが、私達は反対にロシア人はゴボウの食べ方も知らないのだと、自己満足していたことを思い出します。

或る夏の暑い日に森の原木の伐採作業中、休憩となったので沼を見付け、風呂替わりに水浴びをしに沼に入ったところ、足裏に何やら尖ったものが当たる感じがするので、手で触ったところカラス貝でした。早速、戦友達とモグリ、岸に放り上げ、焚火をして飯盒で煮て食べました。その時のスープと貝の味は、忘れえぬものとなりました。伐採作業が続いた数日間は、毎日沼に入り、貝を採って食べると同時に天日乾燥をして保存食にしたものでした。(註一焚火には、マッチがないのでレンズを使用しました。それにカラス貝をロシア人は食べていないようでした。)

飲料水は、大変貴重なもので携帯している水筒だけが頼りでした。戦闘中は毒薬が入っていることを考え、節約のため、できるだけ水筒の水を温存し、流れのある水を飲み、また、ぬかる路に溜まった濁り水をジューっと見つめ、ポーフラなど生き物が住んでいることを確かめて飲んだものでした。消毒用剤はもっていましたが、常に最悪の状態を考え、保存に努めました。

次に感動したこともありました。ソ連の町工場で重い鉄の器材を運んだときのことです。私達は、通常のとおり荷物を担いだり、背負ったりしてそれぞれ作業を始めたところ、工場長が来て「そのやり方では腰を痛めるし、長続きしないから駄目だ。腰に乗せて運べ」と身振りで教え、自ら運んで見せてくれました。私は国が違えば作業方法も違うものだと感じたのですが、作業を終えてからは、合理的な方法であったと親切な心に感動したものです。そして昼ころになって老婆が作業場に来て何やら大声で、手振り身振りで私達を呼んでいる様子なのです。彼女は、手のひらを上に向けて叫んでいるのです。私達は分からずに見ていると、寄って来て手を引き、別室に案内されました。そこは休憩室のようで、大きいテーブルの上にスープとパンが人数分あり、身振りで食べよと言っているのです。私は、食べるということは人間共通なので言葉は分からなくても通ずるものと、老婆の真剣な動作や訴えが心に残っております。

以上、断片的に思いつくままに書きましたが、今では辛い思いが経験となり、何事にも最低の条件に耐え、挑戦することができるようになり、加齢と共に心の余裕ができ、貴重な体験として語り合っております。

(まつもと かつとし 大正12年生まれ)